

帯広畜産大学同窓会報

第13号 平成18年8月 帯広市稲田町西2線11番地 帯広畜産大学内 帯広畜産大学 同窓会事務局発行

第13号発刊によせて

同窓会長

大石 和也

(昭和33年総農卒)



帯広畜産大学同窓会報第13号発刊にあたり、この紙面を借りてご挨拶申し上げます。

私こと、昨年10月の帯広畜産大学同窓会の総会において、前任の高田 薫会長の後を引継ぐことになりました。任期の期間中、この流動する世情の中での母校の発展に全力を尽くしたく思っておりますので、皆様方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて、我らの母校、帯広畜産大学は国の大学改革方針に基づき、平成16年4月以降、「国立大学法人帯広畜産大学」として新たに出発したことは各位ご承知の通りでございます。従って、今年には国立大学法人として3年目を迎えました。新しい大学像として「個性輝く畜産衛生学専門店を志向して」大きく飛躍しようとしております。これも鈴木直義学長を始め諸先生方や関係者の皆様の努力の賜物だと思っております。本学の様に地方の小規模な大学でありながら、大学の基本理念を“食の生産性向上と安全確保”におきながら、存在価値を全国に示していることは意義深いことと存じます。

例えば、国立大学法人帯広畜産大学の平成16年度に係る業務実績に関する評価結果を見ると、全体評価としては教育研究の展開のよさ、学内組織の再編がよく取組まれていること、財務内容の改善で受託・共同研究の受入れ合計が大幅に増加したこと、さらに人的資源の活用、教育面、国際協力、地域貢献室の設置などが大学の特色を活かした社会貢献として評価されており、本学は第3者による評価が高いものと考えております。

母校が奮闘している中、同窓会としても本気になって母校の精神を支える必要があると思われて仕方ありません。

同窓会も従来の親睦団体から一步踏み出して、大学と地方を結ぶ役割、さらに大学運営への当事者支援などその存在意義が進展して、様相が変わってまいりました。各支部の充実におかれましても拡充にご尽力を頂き、組織としても全国的規模での再編を考慮すべ

き時に至っていると自覚しております。

今後とも母校発展のため、皆様のお力をお貸し願いたく切に希望いたしております。

本学大学院に 博士課程の新設

学 長

鈴木 直 義

(昭和30年獣医卒)



平成18年4月10日に、本学学部、別科、大学院修士および博士課程新入学生の入学式が行われ、その中に、本学独自の大学院博士課程畜産衛生学専攻第一期生としての学生15名が含まれておりました。

本学独自の大学院博士課程設置運動は、第7代西川義正学長（1976-1984）が京都大学から学長として赴任された時から始まり、鈴木省三（1984・1990）、坂村貞雄（1990・1996）、久保嘉治（1996・2000）、佐々木康之（2000・2002）学長までの約30年間、重要継続課題として代々の学長および教職員が一丸となって設立に努力されたお陰であります。現在までの先輩諸氏のご労苦に対して心からの敬意と感謝の意を捧げるものであります。これで、本学は組織上では他大学と同様に自前の大学院博士課程を有する大学として高等教育に邁進できるわけであります。これからは、今まで以上に、畜産に特化した単科大学として学部および大学院教育において本学の使命でもある生物学領域での「生命・環境・食料」分野における高度専門技術者養成と学術成果の世界および地域への発信に全学教職員一丸となって努力してまいりたいと思っております。

本学は、単科大学として全国初の全国共同利用研究施設「原虫病研究センター」を有し、その卓越した研究実績のお陰で2002年（平成14年）10月に文部科学省から「21世紀COEプログラム（卓越した研究教育拠点）」に選定されております。初期の研究目的にそって教職員は鋭意努力しておりますが、来年には5年間の最終実績評価がなされます。21世紀COEプログラムは、最終的に平均5.1倍の競争率（50大学113拠点）で、国立大学にとって外部資金（産学連携活動に伴う受託研究、共同研究収入、寄付者からの寄付金収入など）の増収が大きな課題となっております。全国立大学の外

部資金獲得比率では、旧帝大すべてがベスト20にランクインされていますが、幸いに帯広畜産大学が6位に位置し、関係機関から少なからず注目を集めております（週刊東洋経済、2005.10.15）。同窓生や本学後援会からの財政援助も含まれております。文部科学省は来年度からのCOE新プログラムでは、採択拠点数を半以下にして、1拠点あたりの助成金額を現行の倍額程度にする方針だと新聞紙上に載っております。大型外部資金の獲得可否は本学の死活問題であり、本学発展充実のために、我々はポストCOE推進に向けての課題について種々検討を加えているところであります。日本で初めての獣医畜産学領域での「畜産衛生学博士」の学位は、社会でご活躍中の本学卒業生の皆様方には是非ともご活用頂きたいと本心から願っております。卒業生と現役の学生達からも支援される本学は、畜産に特化した我が国でオンリーワンの大学院博士課程と全国共同利用原虫病研究センターの学内連携による「食の安全監視」に関する専門職業人養成と学術の世界発信の大学院重点化単科大学として、確実に一步一步前進したいと念願しております。今後とも同窓生各位の特段なるご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

「大学の責任 その5」

理事・副学長（総務研究担当）
長 澤 秀 行
（昭和53年獣医卒）



平成16年4月に全国の国立大学が法人化されました。我が国の高等教育において、明治維新や戦後の教育改革に匹敵する大改革ですから、組織、規則、意思決定方法等に種々の変革がありました。その中でも、「事前審査から事後評価」への変更が大きな変革であると考えています。新たな事業を進めるに当たり、法人化後は、国からの規制がゆるくなりましたので、帯広畜産大学の特色を示す種々の取り組みが容易に進められるようになりました。しかし、大学の責任が問われるものとして、外部からの評価が義務づけられたのです。

法人化に際しては、大学独自の中期目標・計画を公表し、これに沿った年度計画を毎年3月に文部科学省へ届け出るというルールが設定されました。1年間終了後には、実績報告書を提出して、その進捗状況が順調であるのか、或は達成されていない部分があるか、という点を外部の大学評価委員会の方に見て頂き、採点して頂くこととなります。昨年は、「国立大学の通信簿」という見出しで新聞報道されておりましたので、ご存知の方も多いと思います。全国には5段階評価で3以下の項目を指摘された大学もありましたが、本学は4と5ばかりでした。通信簿をもらって一喜一憂した昔を

思い出します。今年も、8月には学長、理事、事務局長等が実績報告をもとに、評価委員からインタビューを受ける予定です。

この文部科学省による評価とは別に、認証評価機関による大学評価も7年毎に受けなければならないというルールが設定されました。国公立の全ての大学、短期大学、高等専門学校は、文部科学大臣の認証を受けた評価機関（いわゆる認証評価機関です）による評価（認証評価）を受けることとするという制度が導入されたのです。本学の場合は、「大学評価・学位授与機構」という認証評価機関に依頼することにしてあります。これ以外に、大学評価を担当する評価機関としては「大学基準協会」と「日本高等教育評価機構」があります。本学は、平成20年度に大学における教育研究、組織運営、施設設備の整備状況、財務運営状況などについて、認証評価機関が定める評価基準に従って、書類を作成して評価を受けることとなります。

財務諸表の公表も、大学の経営状況を評価されるという意味で大学評価の一つと言えらると思います。「貸借対照表」、「損益計算書」、「キャッシュフロー計算書」、「利益の処分に関する書類」、「国立大学法人等業務実施コスト計算書」が財務諸表です。国立大学特有の会計制度は解りにくい部分が多いという理由で、法人化後は民間が用いている会計制度に変更し、国立大学の財務運営状況を社会に公表して、透明性を確保せよということです。帯広畜産大学が存在することにより、国民が負担した金額を公表することで、大学も経営感覚を持つということが主旨です。平成16年度の場合は（平成17年度については現在文部科学省で審査中です）、帯広畜産大学の経営に際して国民から約34億円を負担して頂いたこととなります。

いずれの評価においても、評価結果を踏まえて大学が自ら改善を図るとするのが目的ですし、法人化されたといっても依然として国から財政支援を受けているのですから社会から評価を受けるのも当然だと思えます。しかし、それぞれの評価への対応に莫大な労力と経費が必要になっていることも事実です。政府が進めている総人件費抑制計画には国立大学法人も含まれていますので、人件費を含む大学運営費（正確には運営費交付金です）は年々3千万円から5千万円程度削減されていくことが決められています。今、まさに大学経営を意識しながら社会に高く評価される大学づくりに向けて教職員が一丸となって努力する必要があると認識しております。同窓の皆様には、変わらぬご支援、貴重なご意見をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

本学の教育等に関する 取り組みについて

理事・副学長(教育・学生担当)

石橋 憲一

(昭和42年農化卒)



本学にとって、念願でありました博士課程が、畜産衛生学専攻修士課程を母体として、今年の4月からスタートしました。学生定員は7名ですが、初年度入学者は14名で、その内訳は外国人留学生が9名、日本人学生が5名となっております。博士課程では、高度な「畜産衛生」の専門家を育成するために、講義・実習・討論が一体となった「総合型科目」や国内外のインターンシップを導入するなど、課程制の実質化に対応した国際的水準の教育課程を編成しています。文部科学省の教育に関わる競争的資金の一つである「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に本学の取組「国際貢献を担う人材育成のための連携教育」が採択されたことを受け、畜産科学科に「畜産国際協力ユニット」を今年の4月から新設しました。このユニットでは、従来の農畜産部門の職業専門人教育に加え、広く国際社会で活躍できる能力、わが国の畜産分野で国際的センスを持ち合わせて活躍できる人材養成を目指しております。

昨年8月に本学とJICAとの「連携協力協定」に基づき、フィリピンに10名、タイに1名の学生が短期ボランティアとして派遣されました。この学生派遣は青年海外協力隊短期派遣制度を利用した全国で初の試みですが、その活動内容にたいしては、関係の方々から高い評価を得ております。さらに本年3月、フィリピン国酪農開発強化プロジェクトへの第2次隊として、再び学生4名が派遣され、約3週間の活動を行いました。8月には6名の学生の第3次派遣も決まっております。フィリピンへ派遣された学生は、ホームステイをしながら、乳質、育種、繁殖の3班に分かれて、国際協力の現場の一端に触れる貴重な体験をしてきました。これまでよりも数多くの本学出身者が、国際社会などで活躍することが大いに期待されます。同窓の皆様には、今後とも変わらぬご支援とご協力をお願い致します。

畜大の発展を祈念して

学外理事(渉外担当)
味の素株式会社
健康基盤研究所長

高橋 迪雄



若干の自己紹介を…。1999年10月に翌年3月の定年を前に東京大学獣医生理学教室の教授を辞して、民間

味の素株式会社に転職して6年半ほどが経過しています。最初は研究班という少人数のグループで出発しましたが、02年3月から現在の健康基盤研究所が設立され、同時に本社に設立された健康事業開発部という組織と共に、従来の「健康食品」とは趣を異にした“健康基盤食品”の創出に当たっています。味の素が世界最大のアミノ酸生産企業であることから、従来必ずしも健康機能素材と考えられていなかったアミノ酸(の摂取)に新たな生理作用を見出し、それを“健康基盤素材”と捉えようとする研究がベースで、元々効果が周知されている素材に基づいて作られているものが多い一般の健康食品とは趣を異にしています。実際には植物由来の素材も研究していますが、植物についてもアミノ酸代謝を中心とした生理機能に基づいた素材の創出を狙っており、「動物生理学と植物生理学の融合」という従来の大学では実現困難な学問分野の創出も狙っているつもりです。

大学卒業後、大学院生あるいは教官として60歳を越えるまで外の空気を吸う機会を持ちませんでしたから、自分たちの研究を基にした商品が開発されていくプロセスを身近で観察することには学ぶところが極めて多く、7年目の今でも日々新鮮です。しかし、商品を創出して利潤を追求するという明確な目的を持った会社の組織運営を目の当たりにするにつけ、どちらかといえば、組織としての大学の在り方を再認識させられることの方が私にとっては大きなインパクトだったかも知れません。

大学の自治、学部の自治、講座の自治、それ自体は近代社会にそれまで無かった学問の府としての組織を生み出すためには極めて重要な主張であったことは確かだと思いますが、それが100年間比較的無批判のまま経過することで、その積極的な意味合いが風化していったことは否めないでしょう。その雰囲気の中で大学職員が再生産され続けた結果、組織としての活性が大いに削がれてしまったことは謙虚に反省すべきと思うに至りました。

現在の鈴木直義学長には、過去東京大学獣医学科に「臨床病理学講座」が新設された時に教授を兼任していただき、その立ち上げに一方ならぬご尽力を頂いたという経緯があります。多少でも恩返しができたらという気持ちで、国立大学の法人化を前に、運営諮問委員会が発足する段階から現在の学外理事に至るまで、法人化に当たっての諸課題の解決に微力ながら参画させていただいています。大学と民間で研究の機会を持ったものとして、組織としての帯広畜産大学の革新に民間の知恵を導入することに少しでも役立てればと思っています。

帯広畜産大学 事務局のその後(近況報告)

事務局長
湯口 太多史



昨年11月1日付けで仙台から赴任しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

初めての十勝・帯広での暮らしにもいくらか慣れてきたところですが、この地での一冬の経験は、大変貴重なもので、自然の厳しさ・その中での人々の温情・連帯感の大切さなるものを実感いたしました。

私の出身地(石川県)も日本海側の寒いところですがその比ではないですね。しかし、これからの季節は、道外から大勢の方が集まる最良の時期を迎え、期待もふくらむ次第であります。十勝の気候風土は、同窓会会員の皆様にとって周知のことでしょうが…

さて、本学の事務を預かる立場としまして、最近の状況をご報告いたします。ご承知のように国立大学法人として、自主・自律に基づき主体的に法人運営を行うこととなって3年目に入ったところですが、本学事務組織についても再編を行い2部8課体制としてスタートし、大きくは「企画総務部」と「教育研究支援部」に分け役割分担を明確にし、教育・研究・社会貢献等を目途とした大学の機能を充実・向上するべくサポートしてきたところです。この間に、毎年、事務処理上に業務改善の見直しを行い少しでも無駄をなくし、その余力を学生・教職員への支援や大学運営に充当するよう全員で努力しております。特に、評価機能・監査機能・広報機能の充実について計画的に取り組む必要があり、また、そのような人材の養成・確保に苦心しているところです。

いずれにしても、本学を取り巻く環境は決して楽観できず、ますます競争化時代となりつつありますが、職員一人一人が元気よく働けるような職場環境を築いていく所存であります。

特色を持った大学の理念と目標を計画的に着実に実行しつつありますが、そのための資源・組織力・周囲の理解と協力がどうしても必要不可欠です。学内における評価点検もさることながら大学のOBである皆様の意見・要望が何よりも大切ではないかと考えております。

本学の情報を発信しているHPや教育研究活動のニュース等をご覧になった際に気がついた点がありましたらご指摘願います。また、気軽に事務局を訪ねていただき熱き思いなどを語っていただければ幸いです。

我慢で 命も社会も進化する

獣医学科長

西村 昌数

(昭和42年獣医卒)



生き物は実に多様です。肉眼では見えない微生物から、昆虫や小鳥や花や大木まで、この地球上に栄えています。栄えているということは生きていくということです。生きていくということは、その内部で代謝が行われていることです。代謝は細胞の反応により支えられています。反応するためには準備が必要です。準備とはエネルギーを蓄えることです。例えば、重い石をゆっくりと持ち上げて、その支えを外すと石が落ちます。落ちて地面に当たったとき、衝突した相手に仕事を残します。それが「反応」です。細胞の反応には引き金が必要ですが、それは蓄えたエネルギーの止め口を開けることです。この例では石を持ち上げて支えている手段です。生き物の多くの反応は、そのような一見受動的とも見える過程で支えられています。

昔々、現在の細胞の中の多くの成分はそれぞれ別個に海の中で暮らしていました。しかし、時とともに彼らにとって有害な成分が海水中に増えてきました。そこでそれらの成分にさらされない特別な「膜」を用意して遮り、彼らはその内部で共存できるように仕組みました。細胞の成立です。そのうち彼らは個々に役割を担い、自分たちの環境を恒常的にしました。その長い長い歴史が、この地球上に命を栄えさせる所以であったと考えられています。

細胞の内部にとって、 Ca^{2+} や Na^{+} などの水溶性のイオンは、時によっては有害になります。そのような有害なイオンを細胞の内部で利用する仕組みが発達しました。細胞膜は脂質二重膜構造になっているので、イオンを通しません。このため、細胞膜にはチャンネルというイオンを通す通路があります。 Ca^{2+} にはカルシウムチャンネル、 Na^{+} にはナトリウムチャンネルと、イオン別に用意されています。もっとも、選択性が低下しますとその限りではなくなります。この通路を通して、電気的な勾配や濃度的な勾配にしたがい、イオンが移動します。移動した側でそのイオンの濃度が高くなり、酵素や生体分子の環境を変えてそれらの活動を変えます。その機能を信号変換と呼び、研究の対象として華やかな世界を醸しています。そのことを利用して一過性の反応を生むのです。

このように命の仕組みを見て来ますと、私たちが生きていく社会とか勤務先の世界とかにも仕組みがよく似た例があることに驚かされます。昨年は組織の危機管理について学科としての対応関係を危惧しました。今年は学科を構成要素から見た運営の危機管理を述べてみたいと思います。

現在の獣医学科を構築する膜というのは何でしょう。獣医学科は教育組織として存在する意義をもち主に専門教育に携わっていますが、学内の原虫病研究センターや大動物特殊疾病研究センターなどにも協力を委ねておりますので、教育に関する限り学科という単位での膜は見えなくなります。学科を構成する大講座を研究組織の単位として見た場合は、以前の小講座制時代のような絆も見当たりません。そのような中で獣医学科を代表する役務が果たすべき範囲を特定できないまま2年が過ぎ去ったというのが現実です。その学科の中に入ったりする人や情報を学科の機能の変化に置き換えることができ初めて情報変換が可能であるとは知りつつも、交流している人的資源の利活用が意に任せぬ実態を恥ずかしく思うこのごろです。そのような悶々の日々にあって、本学科の産業動物臨床関連教員各位が中心となりご尽力されたお陰で近傍の十勝ノーサイとの共同研究が成立し、それが臨床教育に果たしている意義の大きさに驚くばかりです。年間50頭を目標とは申せ、すでに夏前に20頭以上を数える希有な症例が集積しています。導入から病理解剖に至るまでの全ての行程を実習できるのみならず、特定の症例と1対1で取り組んで報告できることが実践教育に果たしている意義の大きさに目を見張っております。十勝ノーサイの臨床獣医師の各位には深甚なる謝意を申し上げます。今後とも同窓生各位の弛まざるご支援とご協力のほどをご依頼申し上げる非礼をお許し願いたく存じます。

畜産科学科

畜産科学科長

荒井 威吉



国立大学が平成16年4月から国立大学法人に移行されてから2年が経過しました。本学は6年間の中期目標として、個性と特色のある研究教育をあげ、研究教育の向上、教育環境の整備、地域貢献、国際交流などに取り組んでいます。これらの成果は、6年後に国の大学評価機構によって評価されます。本学の最大の成果は、2年前に設置された畜産衛生学独立専攻を前期課程として、平成18年度から畜産衛生学専攻博士後期課程が新設されたことです。大学院博士課程の設置は長年の悲願でしたので、今後は獣医・畜産融合領域の研究教育が大いに進展するものと思われまふ。また獣医学教育の充実は全国的に大きな課題ですが、本学でも着々と体制を整えています。法人化後の大学運営では、研究を推進するための科学研究費など外部資金の獲得が重要ですが、本学では大型プロジェクトなどを多く

受けています。その他に、JICA日本本部との包括協定や、海外の多くの大学・研究所との協力協定が締結されており、国際的研究が発展することが期待されます。

平成17年度には原虫病センターの第4部研究施設が完成しました。総合研究棟1号館（旧学部棟）正面のロータリー周辺は駐車場が撤去され、緑の芝生が映えるスペースになり、構内各施設への案内板も設置されて、学内環境も整ってきました。1号館の改装は、本年度第3期工事が行われほぼ完成します。同窓生各位には来学された折りに、整備された構内の様子をご覧いただきたいと思ひます。

学生は従来のように研究室に所属するのではなく、生命・食料・環境をキーワードとする9つの教育ユニットで、自分の選んだ分野の教育を受けます。平成18年度からは畜産国際協力ユニットが新設され、海外で活動できる学生の養成も始まりました。このような本学の教育システムは全国に先駆けた大きな特徴ですが、最近では同様の教育体制を採用する大学が出てきたようです。

なお最近では、全国的に大学などの教員の異動がありますので、今後は本学の教員が全国各地で活躍するニュースを見聞される機会も多くなると思ひます。

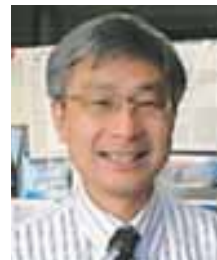
同窓生各位には熱い思いをお寄せいただき、本学のさらなる発展と、有為な人材の育成にご支援をいただければ幸いです。

本学初の独自の大学院博士課程、畜産衛生学専攻博士前後期課程のスタート

畜産衛生学専攻長

宮本 明夫

(昭和57年家畜生産卒)



同窓生の皆様、今夏は西日本では記録的な大雨による大きな被害が出ておりますが、お元氣でお過ごしでしょうか？帯広は内地の酷暑と反対に、極端な冷夏で、農作物の生育の遅れが決定的となったものも出始めております。

さて、この場をお借りして、この平成18年4月からスタートしました本学独自の大学院博士課程について、近況を御報告させて頂きたいと思ひます。平成14年1月に鈴木直義学長が就任されてから、本学はまもなく原虫病研究センターを中核にして、全学体制で文部科学省事業の21世紀COEプログラム（生命科学拠点：5年間に採択され、「動物性蛋白質資源の生産向上と食の安全性確保」に向けて、教育研究体制を構築して参りました。この21世紀COEの研究チームを基盤として、平成16年4月より畜産衛生学独立専攻（修士課程）を立ち上げ、食の安全性確保に貢献する人材育成を開始しました。去る平成18年3月に第1期の修了生15名を輩出したところでありまふ。幸いにして、平成

18年4月から、2年間の修士課程の実績の上に博士課程後期をスタートすることができました。本学独自の博士課程設置は、長年の本学の悲願であり、代々の学長が努力してこられ、本年、このことが現実になったことは、現鈴木学長を始め、多くの学内外の関係各位の強力なサポートを頂いた結果であり、改めて感謝申し上げます。

本専攻は、畜産系教員8名、原虫病研究センターを含む獣医系教員6名、そして任期付き助手3名を加えて17名の教員が専任として3講座、7分野を配置しています。動物医科学講座には家畜生産衛生学分野と人畜共通原虫学分野を、食品衛生学講座には食肉乳衛生学分野、衛生経済学分野および病原微生物学分野を、そして、環境衛生学講座には衛生動物学分野と循環型畜産科学分野を設置しています。本専攻には、幾つかの大きな特色があります。まず、4月と10月入学を可能にし、1年間を4期に分けて2ヶ月間ずつ集中的に各分野を「農場から食卓まで」の流れに沿って学んでゆく「4セメスター制」を取っています。前期課程（修士：2年間）では、学生の専門分野が、経済系、食肉乳化学系、家畜生産系、獣医微生物系、原虫病学系のどれであっても、全員が同じカリキュラムを学び、特に、実習・演習と講義を一体型にして、現場からのケーススタディを題材にした「問題解決型」の議論に基づいた実践的なスタイルで徹底的に広い知識と体験を得られるようにしています。そういった、広い範囲の実践的な知識と考え方を基礎として、後期課程（博士：3年間）では、社会を見据えたテーマの設定をし、1年に2回程度のワークショップを院生と教員が共同で企画運営し、得られた研究成果を社会へ発信します。この際、学会スタイルではなく社会のニーズに対応したわかりやすい情報を発信することが求められます。もう1つの大きな特徴は、指導教員が運営する国内外の共同研究のメンバーとして、相手方に出向き、そこで一緒に研究し、さらに調査やセミナーなど、事前の計画に沿って短期間修行を積むことも、インターンシップ演習として必修単位化しています。今年の冬から動き出す予定です。

最後に、もう1つだけ御報告できることがあります。上述した本専攻の教育プログラムが、平成18年度の文部科学省事業「魅力ある大学院教育イニシアティブ」に「食の安全に関わる高度専門家庭教育プログラム」として7月に採択されました。2年間のプログラムですが、このプログラム資金を本専攻の教育課程の最重要項目の実行に投資し、大学院生が関係する研究プロジェクトの展開を通して、国際的で活動的な人材輩出とともに、食の安全性確保の国際ネットワーク構築に努力してゆく所存です。専攻の教員は、今後、本専攻の例が帯広畜産大学全体に良い波及効果を生み、大学院全体の発展に繋がってゆくことを祈念し、頑張っけてゆく覚悟です。今後とも、本学の御支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

皆様の御健康とご発展をお祈りし、本専攻のご紹介を終えたいと思います。

別科（草地酪農専修）の近況

別科主任

鈴木 三 義

(昭和48年酪農卒)

別科は、農業後継者養成を目的として1960年に設置され、この3月の45期修了生をもって同窓生総数が1,017名となり、大台に突入しました。ご存じのように、その多くが農業の現場の第一線であるいはリーダーとして活躍しております。専任教員の熊瀬先生に調べて頂いた最近5年間の合計100名の修了生の動向を見ますと、実習や研修といった予備軍を含めた就農が56名と最も多く、残りの30名も農協など農業に関連する産業に就職し、その他も含む農業関連以外は14名となっております。また、現役生は、2年が27名（内女子9名）で1年生が17名（女子5名）です。

この4月から別科を担当することになり、ホームページ (<http://www.bekka.jp/>) とメーリングリストを立ち上げました。メーリングリストについては、現時点で熊瀬先生がメールアドレスを把握している方のみの参加となっておりますが、この機会に参加を希望される方は熊瀬先生か私 (mit@obihiro.ac.jp)宛にメールを下さい。

同窓会報第9号で当時の別科主任の堀川洋先生も報じていますが、定員に満たない年が続き、法人化後の大学の中期目標にも別科のあり方が問われており、存続を危ぶむ声も聞こえます。そこには受験生人口の減少からくる大学全入も取りざたされる状況にある中で、4年制への編入も出来ない別科の立場の弱さがあります。私としては別科が農業に大きな貢献をしてきたこと、特に現場では本科を凌ぐものであることを十分に認識しておりますが（ホームページにも修了生の活躍振りを載せております）、時代の流れに逆らい、このまま2年制の別科を維持することは必ずしも得策とは思えません。酪農と畑作の大きな現場を抱える北海道・十勝で農業後継者養成の要望がなくなることは考えられませんので、必然、別科の4年制コースへの格上げが必要と思われます。このことを達成するためには修了生諸兄の後押しなしには到底考えられませんので、ご支援を切にお願い申し上げます。

最後に、皆様の益々のご活躍とご発展を祈願します。

原虫病研究センター： この1年

原虫病研究センター長
五十嵐 郁 男
(昭和52年獣医卒)



原虫病研究センターの1年間の活動をご紹介します。平成17年度においては、原虫病研究センターに国際監視部門が設置され、進化生物学、遺伝生化学分野、獣医学の各研究分野の新たな教員が採用されました。これに伴って、国際監視部門と大動物特殊疾病研究センターの研究棟も増設され、原虫病研究センターとは2階の渡り廊下で結ばれました。4年目を迎えたCOEプログラムとともに、文部科学省の「新興・再興感染症ネット」ワークにも参画し、特に大阪大学との連携により、タイやベトナムを中心とした東南アジアにおける原虫病の疫学的研究を推進しています。また、原虫病により甚大な人の健康や家畜の経済的被害を受けている開発途上国の原虫病に関する国際的な人材育成は、原虫病研究センターの活動の大きな柱です。10年に渡って続けられてきたJICAの「上級原虫病研究コース」は、平成17年9月で終了しました。これに替わって、原虫病研究を主体に食の安全確保に関連した「食の安全確保のための人畜共通感染症対策コース」が、11月に10名の研修員を受け入れて新たにスタートしました。また昨年は、7月に「Parasite and Vector Genomics」フォーラム、8月に第13回分子寄生虫学ワークショップと大阪大学との第2回COE合同シンポジウム、9月に14回日本ダニ学会、10月に第38回日本原生動物学会が、原虫病研究センターの教員を会長や世話役として開催されました。以上のように、原虫病研究センターは皆様の支援を受けながら、研究組織の整備、教育研究活動の活性化に努めてきましたが、今後とも同窓生のより一層のご理解とご支援をお願いします。

地域共同研究センター

帯広畜産大学
地域共同研究センター長
関 川 三 男
(昭和51年酪農卒)



地域共同研究センターは、本年創立10周年の節目を迎えます。この間、センターは美濃羊輔先生を初代として、宮本啓二先生、岡本明治先生と続く各センター長のご尽力により共同研究、受託研究、奨学寄附金、技術相談、知的財産の申請等の件数を飛躍的に向上させてきました。さらに学内の研究成果から派生する知

的財産の発掘や、これらの産業界への紹介や事業化、さらに講演会やイベント参加等の広報活動を通じて学内外を問わずにセンターの知名度を上げ、地域に頼られる存在として認知されてきております。

実態として平成17年度は、共同研究67件、受託研究47件、寄付金115件、技術相談248件が実施されました。特筆すべきは受け入れた外部資金の総額が6億円を突破し、技術相談は、ほぼ毎日1件以上行われたことです。資金に関しては、文部科学省からの運営費交付金が毎年縮減されるため、本年度も引き続き外部資金の更なる獲得が必要です。

共同研究の成果としては、フジ防災(帯広市)、ランランファーム(清水町)と共同開発した「かしわ茶」が製品化され、上品な甘みが評判です。これはカシワの葉に抗コレステロール効果(ラット)が認められたことから製品化に至りました。カシワは十勝の原生林で、その葉は本学の校章にも用いられています。また、日清紡との共同研究において、ゼオライトをコットン繊維内で結晶化させた新素材がウイルスを99%以上カットすることが確認され、これを利用した「ゼオライトマスク」が商品化されました。いずれの商品も順調に売り上げを伸ばし産学連携の成果として注目されています。

本年1月1日から鈴木直義先生が第2期目の学長として本学の運営に当たられております。大学法人の学長は、例えば企業の社長に相当し、地域共同研究センターは営業三課です。一課と二課は、それぞれ学内における教育と研究を主に担当し、三課は、これらの成果に関する学内外の連絡調整と企画が任務と考えております。これまでセンター長として敏腕を振るわれた岡本明治先生は4月1日からフィールド科学センターへ移動され、後任として畜産衛生学専攻の関川三男が地域共同研究センター併任となりました。平成18年度は、センター創立10周年記念祝賀行事を中心に、地域における学内外の知的・人的・物的資産の有効活用に資する企画と迅速に実行し得る体制強化および意識改革を推進する所存でおります。また、これまでに賜りました御支援に感謝するとともに、築き上げられた信頼と機能を損なうことのないよう大所高所からの御意見をお寄せ頂きたく存じます。同窓の皆様におかれましては、共同研究や醸金のご相談を初めとして同期会の企画など何か母校にご用向きの際には、どうぞ地域共同研究センターへ気軽にお申し付け下さい。

特色ある畜産フィールド 科学センターを目指して

畜産フィールド科学センター長
岡本 明治
(昭和44年草地卒)



同窓の皆様お変わりございませんか？ 2006年4月から畜産フィールド科学センター左久センター長の後任として就任しました岡本明治です。

現在のフィールド科学センターは、乳牛170頭（搾乳牛70頭）、肉牛16頭、馬11頭、圃場面積120haを有し、年間の乳生産は680tに達しています。搾った生乳はセンター内の乳製品工場でパック詰めし、市民生協などを通して年間15万個程度販売しています。

教育に関しては、新入生全員の搾乳実習をはじめ学部教育実習として毎日多くの学生と教員が出入りし、その数は年間延べ3,000名に上ります。

また研究に関しては、年間の研究課題が約60件、試験共用家畜は延1,000頭と、畜産大学ならではの実績を上げております。

さらに地域貢献事業として年間50～60件、約1,200名の子供たちの見学、写生会、搾乳体験や高校生などへの教育を実施しております。

このような、大学と地域に対する貢献は、併任のセンター長以下専任教員3名（現在2名）、事務職員1名、現業職員15名（内パート職員7名）で担っております。

専任教員の木田助教授は、わが国における代謝プロファイルによる乳牛の栄養管理の第一人者であり、センター飼養牛の疾病治療と栄養管理は勿論のこと全国からの分析依頼とデータの解析依頼に忙殺されております。

畜産フィールド科学センターは、いわゆる旧農場を全学共同利用施設として2004年に整備されましたが、農場からフィールド科学センターへの変更は、単なる名称の変更だけでなく職員の意識の変革も要求されております。すなわち組織の経営体としての自立です。勿論、教育、研究が中心となることに変わりはありませんが、その教育、研究を効果的、且つ魅力的に展開するための生産加工があります。経営体としての自立は単なる金儲けを意味するのではなく、学生と教員に真に魅力的な実践教育と基盤研究の場を提供すること、そして職員が誇りを持って働ける職場にすることが経営体としての自立です。その上で、地域の人々に情報発信する場でもある必要があります。歴代の諸先輩が築き上げてきた伝統を守り、センターの教職員が一丸となって新生フィールド科学センターへの変貌を目指し日々挑戦しております。

ご来学の際は本部から約15分の白樺並木の散策をかね、是非センターまでお越しください。低温殺菌のフレッシュな畜大牛乳やアイスクリームを準備しております。

附属家畜病院

家畜病院長
宮原 和郎
(昭和53年獣医卒)



家畜病院周囲の眺望が大きく変わりました。家畜病院正面玄関前（東側）の入院パドックスペースに総合研究棟4号館が建設され、4号館から原虫病研究センターと新家畜病院2階部分へはそれぞれ連絡通路が設置されました。これに伴って、ロータリーから馬術部方向へ向かうメインストリートから家畜病院正面玄関に向かって延びていた道路は家畜病院北側に変更され、メインストリートからの眺望は大きく様変わりしました。家畜病院北側に変更された道路の先にあった旧伝貧厩舎、実験動物舎、総合研究棟2号館（環境棟）と家畜病院で囲まれた家畜病院北側のパドックは最大65台が駐車可能な大型駐車場に変わりました。新しい家畜病院パドックはやや縮小されたものの総合画像診断車（X線車）車庫の南側に整備されると共に、X線車車庫とパドックとの間には広い道路が整備され、老朽化したD型飼料庫は一回りサイズを大きくして改修されました。家畜病院の設備としては、高速撮影が可能な4列マルチスライスX線CT装置が導入されて以来、小動物診療を主体として牛や馬に対しても応用され、診断治療に有用な画像を提供していますが、大動物のCT検査に際してはCT検査室に併設された旧大動物診療室（現在多目的スペース）で全身麻酔等の処置を行わなければならない、安全な倒馬や全身麻酔下における搬送にはスペース的にも設備的にも問題となっていたことから、貨物用コンテナを改良した冷暖房完備の倒馬室をCT検査室前に設置しました。また、大動物用CT検査架台についても実際にCT検査に使用し始めて色々な不具合が明らかとなってきたことから現在改良中であり、これらによってより安全に大動物臨床例に対する応用可能となるものと期待されています。また、大動物の飼養・管理のための乾草ロールや起立不能症例の搬送に必要な大型重機であるスキッドステアローダーが更新されました。重機の取り扱いについては、労働安全衛生の観点から事務局の指導により積極的に教職員が安全取り扱い講習を受講した上で使用しています。小動物診療においては、超音波診断装置やカウンターショックなどの機器の更新・整備が引き続き行われていますが、平成17年度から採用した動物看護師（小動物診療勤務経験年数4年、畜産科学科卒業）や新規卒業の臨床研修獣医師が診療参加し、大きな戦力となっています。特に平成17年度には専修教育のほとんどが必修科目となるなどカリキュラムが大きく改訂された平成14年度獣医学科入学学生が5年次に進級したことに伴い、時間帯によっては処置室内

に溢れんばかりの診療実習・見学学生がいる一方で、午前中の外来診療時間帯であっても学部学生が全くいない状況が発生しています。すなわち、二次診療施設としては各種検査機器を駆使した高度診療を常時実施可能とするために従来から行われてきた学部学生依存型の診療体制の変更が必要不可欠であり、獣医教育病院としては臨床実習が必修科目である学生に対する効率的で円滑な臨床教育の場の提供が迫られています。

大動物特殊疾病研究センターの4年間

大動物特殊疾病研究センター長
牧野 壮一
(昭和54年獣医卒)



近年、O157や鳥インフルエンザ、BSE問題など、食の安全確保が大きな話題となっていますが、帯広畜産大学は日本社会における健康動植物生産から食品までの「食の安全管理」に対する職業専門人養成と衛生管理への専門に特化された応用開発研究成果による社会貢献を目指して大学改革を推進しています。この趣旨のもと、国際貢献も視野に入れた畜産・食品衛生に関する教育研究と技術支援の中核を成す組織として、学内の畜産学部と全共施設である原虫病研究センターの獣医系教員を中心に2002年8月に緊急的に設置されました。2003年には教官ポストの純増が文部科学省より認められ、総勢7名で構成されています。その後2005年4月の大学の法人化に伴い、学内施設として部局化されました。

昨年度はセンターにとって色々な出来事がありましたが、大きな出来事の一つは新棟の完成でしょう。今までセンター員はプレハブ住まいで落ち着いて研究生活ができませんでした。2005年に約2,400㎡の総合研究棟建設が認められ、2006年4月に完成し引っ越したばかりです。BSL2/3実験室、動物感染実験室、細胞培養や遺伝子組み換え実験室、セミナー室などを備えており、いかに有効活用し、活発な教育研究成果をあげることができるか、今後の課題と思っています。一階はオフィス空間で二階が実験室になっています。新棟には原虫病研究センターの一部も同居しており、なかなか興味深い建物です。

もう一つは本年4月より畜産衛生学専攻博士課程がスタートしたことで、センターの私と今井教授が食品衛生学講座の専任教官として移動しました。第一期生がセンターにも入り、畜産・食品衛生の高度専門家を育成しようとセンター全員が取り組んでいるところです。

まだスタートして日の浅い組織ですが、本年度より新たな環境で、教官と研究員、そして大学院生や学部生が農獣医学の発展のために日々努力しています。基礎、

応用そして臨床獣医学の融合した組織として今後いかに発展するか是非期待していただきたいと思います。

保健管理センターのこの一年

保健管理センター長
中村 公英

早いもので昨年4月に帯広畜産大学に赴任して一年が経過いたしました。教職員の皆様方には一年間大変お世話になりました。

この紙面をお借りして昨年度の保健管理センターの利用状況をご報告いたします。平成17年度のセンター利用者は、延べ職員312人、学生1,157人（診療1,046人、精神相談等112人）でした。過去2年間と比較しますと、平成15年度、職員463人、学生1,590人（診療1,199人、精神相談等391人）、平成16年度、職員478人、学生1,282人（診療1,148人、精神相談等134人）となっております。これを見ますと昨年度は職員、学生ともセンター利用者は減少しており、職員、学生とも1年間健康に過ごせ、大学にとっては良かったと考えられます。しかし、職員の利用減少は平成17年4月から、当センターが共済診療所となり、一般の医療機関と同様に保険診療（一部有料）となった事が大きな要因と考えられます。即ち、教職員や家族の投薬、検査が3割負担となり、さらに非常勤職員の診療は10割負担（後で手続きをすれば3割になりますが）となった事により、利用を控えるようになった職員が多数おられるものと推察されます。これは独法化に伴い全国的な流れで、診療所を廃止する大学も有ったと聞きます。幸い当大学では教職員の皆様のご理解で診療所として継続する事となりましたので、風邪などの応急処置、高血圧、糖尿病、痛風等の慢性疾患で他の医療機関を通院している方で、時間の関係で投薬や検査を希望される方は是非センターをご利用下さい。

一方、昨年度の学生利用者の減少は精神相談の減少が一因と考えられます。大学生にとり精神疾患は身体的な疾病に比べ、休学や退学の大きな要因になりますので、精神相談の利用者が年々減少している事は大変良い事と考えます。事実、平成16年度の病気による休学者は7名に対し、平成17年度の休学者は4名に減少しています。当センターとしましては、今後も学生相談室と連携し、学生のメンタルヘルスに努めたいと考えています。

さて、平成17年度にセンターではAED（自動体外式除細動器）を購入いたしました。AEDは心肺停止者の蘇生率を高めるため、平成16年7月の法改正により一般の方でも使用が認められました。AEDを使用する機会が無い事を願っておりますが、教職員、学生の皆様には当センターにAEDが設置されている事をご承知置き下さい。

以上、この一年間のセンター利用状況をお知らせいたしました。今年度も宜しくお願いいたします。



発刊に寄せて

別科(草地畜産専修)の近況：平成17年の原稿

(事務局ミスにより昨年度掲載できなかったものです。)

別科主任

山田 明夫

同窓十勝会会長

太田 助

(昭和32年総農卒)

別科同窓会員の皆様には、本学で学び、遊び、そして友と飲んだ多感な青春時代が、現在の皆様の心の支え・糧、あるいは財産となっていることと存じます。

3月、第44回別科終了証書授与式が挙行され、別科設置以来996名の修了生が社会へ巣立ちました。最近の農業後継者の傾向として、卒業後に他の酪農家での実習あるいは酪農ヘルパー・乳検検定員・農場職員などを数年経験後に就農するケースが多くなっております。また、求人職種が多岐化し、数年前からは女子の家畜人工授精師の採用もあり、その仕事振りも男子同様に非常に高い評価をいただき、喜ばしく感じております。

4月には、別科46期生として28名(道外出身者8名、十勝出身者11名)が入学し、在籍者は51名(うち女子学生18名)になり、活気に溢れております。

ところで、ご承知の方も多いと存じますが、豊頃町農業協同組合長として、十勝農業の牽引役を担っておられた別科4期生の山口義弘氏(昭和41年修了)が、61歳の若さで惜しまれつつ5月6日に逝去されました。氏は北海道農業協同組合中央会の副会長の要職にも就かれ、中央との太いパイプを通して北海道農業はもちろんだ日本農業の改革にご尽力いただいていたところでありました。誇れる先輩のお一人であった氏の生前のご活躍を偲び、ご冥福をお祈りいたします。

先日、本学附属畜産フィールド科学センター(旧附属農場)に昭和47年まで在職されておりました石井格先生が、『黎明寮歌』のCDを持参して熊瀬先生を訪ねられました。黎明寮歌は、別科12期生の横山敏氏(昭和48年修了)の詩に石井先生が曲を付けられたもので、歌詞は現在も黎明寮食堂に掲示(体育の大橋公德先生直筆)されております。しかし、この寮歌は、当初は学生間で唄い継がれておりましたが、少しずつ節回しも変化し、ここ20年ほどは唱れておりません。このことを石井先生はずっと憂えておられたようで、詩吟で鍛えられた先生ご自身の声でCDに収録され、持参された次第です。石井先生からは持参CDのダビング許可をいただきました。「正調!黎明寮歌」をご希望の方は別科専任教員 熊瀬(Tel: 0155-49-5716、Fax: 0155-49-5716)までご連絡下さい。

帯広畜産大学は法人化を機に大学の個性・特徴をさらに明確にし、社会の本学への期待度をより高め、これに対応できる大学へと変革して行かなければなりません。同窓の皆様には一層のご助言、ご指導、ご支援をいただきますよう切望いたしております。

平成17年10月16日・大学本部棟大会議室で「同窓会各支部代表者と鈴木直義学長との懇談会」に出席(私は、同窓十勝会の大石和也前会長の後任として会長を拝命。)しましたので、先ず、その折りの会長と学長挨拶をアレンジして紹介します。

冒頭、大石会長が『同窓会の目的(規約第2条[会員相互の連絡と親睦[大学の発展に寄与すること])に沿って活動を充実してゆきたいので、支部長各位のご支援ご協力をお願いします』との挨拶がありました。

次いで、学長から2004年4月から「国立大学法人帯広畜産大学」《所謂、独立行政法人》として新生スタートしたこと。法人化後は1年間で約3千万円の予算が減額される厳しい状況の中で、学生・教官は従来通り、運営は年々第三者機関の実績評価により、結果責任が問われ、予算に如実に反映され、場合によっては大学の存廃も問われること。

そのような中で「新生大学の初代学長」として全学一致して、小さな大学ではあるが、他に類例のない獣医・農畜産に特化した世界に燦然とその個性が輝く「専門店単科大学」目指して努力していること。等が語られ、重要な大学に見られるように『同窓会の皆様の絶大なご協力』をお願いしたい、との挨拶がありました。

私達同窓十勝会は大学の地元帯広・十勝に在り、その数1,991名(平成16年11月発行同窓会名簿による)を擁しております。本部同窓会大石会長の指揮のもと、本部事務局と濃密な連携をとりながら、全国に広がる卒業生を各地で績めておられる各「同窓会支部」の中核的存在として、支部相互にも出来るところから横の連絡をとり合い一層の会員親睦を図っていきたいと思います。

内部的には、帯広・十勝の各町村及び地域ランチ、各職域ランチの連絡網組織化等に力を注ぎ、そのプロセスの中で、会員相互の連絡・親睦をはかりつつ、『学長がその豊かな人間性と人間関係と、研究・教育に対する強靱な意思と、学内一丸となって内容のある実績を着々と目に見える形にしておられます』ことで、地域密着型、各種企業提携型、更には国際協力機構JICAとの緊密な連携型、等々に見られる大学活動が、その輪を拡げておりますことを理解し、更にバックアップするサポーターとして、経済的にも更なる支援体制をとっていきたいと思いますので、会員各位のご支援とご協力をお願い申し上げます。

先般、(平成18年4月)役員会が開かれ、「同窓会名

簿発行年」にあたり協議がありました。そのときに役員・事務局でもごも話し合われたことは、「名簿の単価」や「会報の発行形式」等々に関しても、その財政的背景事情が色濃く出ておりました。

同窓会会則の中でも、「本会の経費は、会費、寄付金及びその他収入をもってこれに充当する」となっておりますので、何らかの形で会員の自発的な寄付金や各種広告宣伝料金（会報の発行部数は住所登録会員数と言う5千部を遙かにこえるものですから、相当な宣伝広告は出来るものとおもわれます。）等々が集約出来れば、同窓会としても、もっと機能的・先進的で親しみやすい活動が出来、大学発展に対する寄与も易くなるように思いました。

会員各位の意見などありましたら寄せて頂きたいと思っております。

更に、同窓会とは別に『財団法人・帯広畜産大学後援会』がありまして、大学の研究助成、海外研修助成、外国人研究者招へい助成、国際交流推進助成、教育研究施設等整備・保全助成、学生に対する奨学助成等々8項目に亘って、大学の後援活動がなされております。

この後援会では、後援会・会費年1万円で、加入を呼びかけております。学長・同窓会長は、同窓会員に、この会員になって下さるよう広くお願いして頂きたい旨のお話がありましたが、出来ればこれも、大学の教育・研究・その他活動に直接的に支援することに結びつきますので、会員の自発のご意向でご加入頂きますよう宜しくお願い申し上げます。（これは、会報とともに、振り込みに便利な「振替用紙」が同封されますので、これを用いて宜しくお願いします。）

札幌同窓会近況

札幌同窓会会長

田村 誠 朗

(昭和39年獣医卒)



昨年秋、前会長の安田勲氏の「同窓生として何が出来たのか、何をやらなければならないのか」のご意向を受け、バトンタッチをしましたが、いまだに「何も出来ず」の状態で、「何をすれば良いのか」を模索している毎日で、当分道は見つからないようである。

本部事務局によると、当会は十勝同窓会と並んで1,600名の会員とのことではあるが、実際には500名程度の会員しか所在が把握出来ていない。同窓会名簿とは一体何なのかと疑問に思うものである。残りの方々の消息を知るためには、莫大な経費と時間が必要で、これには本部の継続的な支援を願うしか方法はないようである。今年6月から施行された個人情報保護法が今後の大きなネックにはなると思われるが、支

部会員の的確な把握をすることが、健全な同窓会運営に直結するのではとも思っている。

当会では、2年に一度総会・懇親会を開催し、学長と同窓会事務局長にご出席をいただいているが、出席者は100名以下の状態が続いている。特に、若い会員と女性会員の出席が皆無に等しい。このことは、同窓意識の欠如だけでは無く、同窓会に魅力と期待を持つ会員が少なくなったのと、そのことに気付くのが遅れ、対策を講じなかった中・高齢会員に責任の一端が有ると思われるが、解決策を見出すまでには当分の歳月が掛かりそうで、まずは支部役員一致団結し、良策を見いだす努力が必要だと考えております。

多数の会員が集まり、熱気にあふれた札幌支部同窓会は、終宴を飾る逍遥歌の朗々たる韻律が会場一杯に満ちあふれ、余韻を背に再開を約して散会しましたと、各地の皆様にも一日も早くご報告が出来ることを願っております。

札幌管内におられる同窓生の皆様に、この場をお借りし、2年に一度の札幌支部同窓会に是非ご出席下さいますように、役員一同よりお願い申し上げます。

オホーツク支部近況

オホーツク支部長

坂井 清 治

(昭和33年獣医卒)



平成15年秋に、オホーツク支部を結成してから2年を経過し、第2回目の総会を平成17年9月3日、北見市のホテルにおいて開催致しました。

同窓生31名が参加し、大学からは長澤副学長、同窓会からは高田会長のご臨席を頂きました。

来責挨拶の中で、長澤副学長より、畜大の現況をスライドにしたがって説明が有り、国立大学が独立法人化されてから、その運営が大変厳しさを増している一方で、畜大の特徴ある研究から、民間との共同研究も活発に行われている事も報告され、私たち同窓生としても心強く感じました。

その後、高田会長から同窓会の現況が報告されました。

次に総会に移りましたが、決算報告、役員改選などの総会議案がいずれも満場一致で承認されました。ただ一部の会員から、総会の出席者が少ないので、役員以外に各町村に連絡員を置き、多くの会員が出席するようにPRすべきとの貴重な意見が有りました。次回に向けて検討したいと思っております。

又、出席者からは、支部会員名簿を欲しいとの要望がなされましたが、何とか努力したいと思いますと答弁いたしました。しかし、本年より個人情報保護法の

関係から、難しい問題もありますが十分注意をして実現したいと思います。

総会后、一番先輩の昭和22年獣医科卒の小間さんの挨拶、一番若い平成17年畜産環境科学科卒の小塚さんの乾杯で、懇親会に移りました。懇親会は、懐かしくも楽しい時間を過ごし、平成13年畜産環境科学科卒の園川さんの締めで、今回の再会を約して解散いたしました。

当支部の副会長であります小島東藻琴村長、堀佐呂間町長がオシドリで参加頂き、ご協力頂いた事に感謝いたしますと同時に、熱い仲を羨ましく拝見させていただきました。有難うございました。

関東同窓会の近況

関東同窓会会長

田中正三

(昭和31年獣医卒)



恒例の関東同窓会総会及び懇親会は、平成18年6月17日東京銀座ライオン7丁目店において、会員62名及び来賓として母校から鈴木直義学長、昨秋新しく就任された湯口太多史事務局長のご出席を頂いて開催しました。今年は、昭和50年代ー平成にかけて卒業された若い方が13名参加され、中でも女性6名が参加され華やいだ会に盛り上げていただきました。

総会は、渡部幹事長の司会の下、会長挨拶に続き平成17年度事業・決算報告並びに監査報告がなされ、異議なく承認された。次に本年度の事業計画(案)・予算(案)が提案され原案通り承認された。この中で、昨年度実施予定の会員名簿の作成・配布が諸般の事情から今年度に持ち越されたことについて、次のような補足説明があった。会員名簿は2年毎に本部が発行する会員名簿や会員からの異動通知を基に毎年名簿を訂正し、より正確を期しているが、それでも例年1割以上の通知が宛て先が不明として返送されてきます。最近プライバシーの意識の高まりから名簿に不掲載を希望する方も増えています。当関東同窓会としては、当面不掲載希望の方は会員名簿から削除し、また住所が確認できない方や最近3年以上年会費未納の方に対しては会員名簿を送付しない事とし、秋に向けて発行準備を急いでいます。

最後の議題として、任期満了に伴う役員改選が行われた。今年に入って常任幹事会で役員交代の大枠が話し合われた結果、会の運営も厳しい中なので、「体調や仕事の関係で辞退される方の交代は認めるがそれ以外の方は原則続投」という方針が決まり、総会前の幹事会で最終案が決定し、総会に諮ったところ原案通り承認され、以下(敬称略)のように決定しました。

会長田中(31V)、副会長には永江(23C)、梶(25V)、各務(35D)、野川(36V)が留任の他、前幹事長の渡部(32V)、前監事の森田(41V)が新たに就任。退任された林(35D)監事に代わり榎崎(33V)、尾形(39V)が就任、また、新しい幹事長に事務局から加藤(42D)が就任しました。

新事務局は事務局長の加藤幹事長はじめ、総務担当は、中村(32D)、細川(48V)、池ノ谷(4A)、会計担当は、太田(40V)、星野(51V)、広報担当は、伊藤(31V)、岩田(39A)、中林(38A)、名簿担当は、野川(36V)、近藤(39V)、高鳥(45V)の皆さんが引き続き引き受けて下さいました。常任幹事は、事務局員全員のほか10名の方に、また幹事には21名の方々に夫々お願いしました。今回退任された方のご尽力とご苦勞に深謝致しますと共に、今後新役員全員で関東同窓会の発展に向けて頑張る参りますのでよろしくご支援とご協力をお願い申し上げます。

なお、懇親会では、昨年暮に再選された鈴木学長が法人化3年目を迎えた母校の近況、特に今年度から畜産衛生学分野の大学院博士課程の教育・研究が開始され、健康動物の生産から畜産環境衛生、食品衛生に至る国際的な専門家の養成機関としてその活動が開始された事、また企業や国際機関、地域との連携を深めつつ活発に活動を展開している事等が報告された。湯口事務局長からは、(財)帯広畜産大学後援会が行う教育・研究支援のための助成金確保の為に賛助会員に加入し寄付をして頂きたい旨の依頼があった。当会の会員で昨年新たに加入された方は60名であり、引き続き加入者が増加する事を願っております。その他初参加者の自己紹介や先輩会員からの激励の言葉等参加者間で賑やかに交流の輪が広がる中を時間は過ぎ、最後に全員で来年の再会を約して散会しました。

近畿地区畜大について学長と語る会の開催

兵庫県支部事務局

長谷川 隆一

(昭和53年獣医卒)

昨年、帯広畜産大学総務課より県支部で総会等を計画されていれば、鈴木学長が参加し、大学の近況等を報告し支部との絆を深めたいとの話がありました。兵庫県支部では10月頃に総会をと考えていたのですが、俵会長と相談したところ、せっかく関西まで来て頂けるのであれば、近畿全体で開催したらどうかとの話があり、勝手ながら兵庫県が中心となり、近畿各府県の代表の方々に発起人という形で役をお願いし、平成17年11月26日(土)神戸市で「近畿地区畜大について学長と語る会」ということで開催しました。

当日はお忙しいなか鈴木学長に出席いただき、独立行政法人となった大学の近況等のご講演をいただきま

した。同窓生も遠く、和歌山県、奈良県等全ての近畿府県から44名の参加をいただき、鈴木学長の大学に対する熱い思いを聞かせていただきました。参加した同窓生からも、もっと大学の名前を冠した商品を販売する等新たな取り組みが必要ではとの意見も出され、今後の大学の在り方、同窓生の支援等について熱心な議論が展開されました。その後懇親会に移り、最後は全員が肩を組み円陣となって逍遙歌で閉めることができました。

今回の会は、厳しい大学の現状を認識するとともに、県支部の無い近畿府県でも同窓会組織を立ち上げ、ゆくゆくは近畿同窓会組織ができればとの話も出るなど非常に有意義なものとなりました。今後、兵庫県支部でも同窓会組織の強化、大学への支援等について、十分検討していきたいと考えております。

最後になりましたが、無理に日程を調整いただきご講演頂きました鈴木学長と各府県の発起人及び当日ご出席いただきました方々に改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

会 員 だ よ り

計 報

平井克哉先生（昭和38年獣医卒）より

昨年春、恩師西武先生が他界したことを獣医師会報で知り、生前お住まいの养老院を尋ね、納骨先や連絡先などを聞いて、札幌に戻り、気にしていました。

お盆入りの8月13日に、西武・静子恩師の墓を小樽のお寺（量徳寺の4号館、西清・甥の管理）に訪ね献花してきました。記帳簿があり、納骨以来の記帳を読みましたが、弟子（卒業生）では私・家内が最初でした。そこで、相談です。ご承知のように先生にはお子さんがおられませんから、甥御さんがお墓をお守りしておりますが、次回の畜大同窓会誌のお知らせ欄に、お寺の名前や電話番号などを掲載することはできませんか。小樽運河見学ルートの近くですから、教え子たちも、墓参し易く、便利な所です。パパ・ママも喜ぶでしょう。

獣医公衆衛生学講座は1962年（昭和37年）に開設され、微生物学講座から転出された西武教授が初代講座主任として発足し、主として環境衛生の研究が行われた。1975年（昭和50年）に退官された西教授の後任として、佐藤儀平教授に講座が引き継がれた。

西武先生は、獣医学科創設の初期から家畜微生物学と獣医公衆衛生学教室の教授として勤務し、60年以上も帯広市に住まわれました。先生ご夫婦には、お世継ぎがいなく、学生を子供のように可愛がっていたので、パパとママの愛称で慕われておりました。先生は、帯

広厚生病院で骨折の治療中の平成16年4月16日に、93歳で永眠されました。現在、先生ご夫婦は、先生の弟さんの次男（西清氏）がお世話され、小樽市の観光名所：運河沿いの量徳寺（0134-34-2244）の納骨堂におられます。機会がございましたら、是非墓参してみてください。

恵庭のいちご便り

田中清一氏（昭和25年農学卒）より

平成18年5月14-15日、長い間続けてこられた「のいちご会」最後の総会並びに親睦会が行われました。遠路、埼玉県や芦別、それに帯広からも参加者があって賑やかに行われたとのこと。ご連絡に寄りますと、総会や親睦会は定期的には行わないが、のいちご会の名称は残すとのことで、今後は集まれる時に声を掛け合ってお酒を呑もうとのことでした。

因にのいちご会とは、農学科一期を振っての・い・ち・ご・会だそうです。

ブラジリアンドリーム成就の便り

飯崎貞雄氏（昭和40年酪農卒）より

井田義朗氏（昭和28年酪農卒）がブラジリアンドリームを達成され、なんと1,800ヘクタールの大地主になられ、現地のサンパウロ新聞に3月7日から10日まで連続4日間にわたって成功の特集記事が掲載されたとのこと。大豆栽培で成功されたとの記事を読みました。



平成17年度 帯広畜産大学同窓会 総会報告

- ・日 時 平成17年10月15日（土） 11：00－12：00
- ・場 所 十勝農協連ビル 5階 大会議室
- ・出席者 43名

- 議事 1. 平成16年度事業報告
- 議事 2. 平成16年度会計報告
- 議事 3. 平成16年度会計監査報告
- 議事 4. 役員改選
- 議事 5. 平成17年事業計画
- 議事 6. 平成17年度予算案

以上6議案について満場一致で了承されました。なお、議事2.の平成16年度会計報告、議事4.の新役員および議事6.の平成17年度予算については、下記の通り、ご報告いたします。

平成17年度 帯広畜産大学同窓会役員 任期（平成17年10月～平成19年9月）

同窓会長	大石 和也（昭和33年 総農）
副会長	松井 孝志（昭和29年 酪農）
	大田 助（昭和33年 総農）
	田村 誠朗（昭和39年 獣医）
	樋口 昭則（昭和46年 酪農）
	松井 高峯（昭和46年 獣医）
事務局長	西村 昌数（昭和42年 獣医）
庶務	高橋 英三（昭和46年 酪農）
	辻 修（昭和53年 工学）
	小嶋 道之（昭和55年 農化）
会計	小俣 吉孝（昭和47年 獣医）
	柏村 文朗（昭和49年 酪農）
	手塚 雅文（昭和60年 生産）
名簿編集	岸本 正（昭和55年 工学）
	三津原 勝（昭和55年 工学）
	井上 昇（平成6年 獣医）
監事	山田 純三（昭和39年 獣医）
	松田 清明（昭和41年 総農）
顧問	岸上 正治（昭和18年 獣医）
	吉川 睦夫（昭和25年 酪農）
	三浦 弘之（昭和30年 酪農）
	高田 薫（昭和31年 総農）

なお、総会終了後、42名の同窓生で懇親会を行いましたことを、併せてご報告いたします。

個人情報保護法施行にともなう 個人情報の管理体制について

平成17年4月より個人情報保護法（個人情報の保護に関する法律）が施行されました。帯広畜産大学同窓会におきましても会員の皆様の個人情報の取り扱いには従来以上に万全の注意を払うことが必要となりました。そのため帯広畜産大学同窓会では、平成18年4月22日に臨時役員会を開催し、了承を得ましたので下記の通り、ご報告いたします。

平成17年度 帯広畜産大学同窓会 臨時役員会報告

- ・日 時 平成18年4月22日（土） 12：00－14：00
- ・場 所 帯広畜産大学 総合研究棟1号館E2502室
- ・出席者 18名

- 議事 1. 「帯広畜産大学同窓会 個人情報保護方針」
について

帯広畜産大学同窓会の個人情報保護方針の原案について、審議の結果了承された。後記「帯広畜産大学同窓会 個人情報保護方針」参照

また、同窓会支部会を開催するに当たっての個人情報の提供に関しては、各支部から個人情報の提供を依頼された場合、紙媒体で支部長もしくは事務局長に郵送する。ただし、個人情報保護の観点より、電子情報では渡さない。との実施案が、了承された。

帯広畜産大学同窓会 個人情報保護方針

1. 個人情報管理について
 - (1) 帯広畜産大学同窓生に関する個人情報の管理主体は、帯広畜産大学同窓会とする。
 - (2) 帯広畜産大学同窓会は、個人情報を正確に処理するよう努める。
 - (3) 帯広畜産大学同窓会が管理する個人情報は、帯広畜産大学同窓会事務局経由で帯広畜産大学が共有できるものとする。大学側が、帯広畜産大学同窓会が管理する個人情報を使用する場合には、事前に帯広畜産大学同窓会事務局に連絡し、帯広畜産大学同窓会役員に使用承認を得ることとする。

(4) 帯広畜産大学同窓会員から得た個人情報の内容は、本人の承諾なしに帯広畜産大学・帯広畜産大学同窓会関係者以外の第三者に開示することはできない。ただし、以下のような場合は、例外として情報を開示できるものとする。

- ・法令の規定による場合
- ・本人ならびに公衆の生命、健康、財産等の重大な利益を保護するために必要な場合

(5) 個人情報は、原則として本人に限り、開示・訂正・削除を求めることができる。

(6) 帯広畜産大学同窓会が外部の企業に、個人情報のデータ処理ならびに発送作業を委託する場合は、安全管理のための措置をとるものとする。

2. 個人情報の使途

- (1) 帯広畜産大学同窓会会報の配付
- (2) 帯広畜産大学同窓会名簿の作成・発行・配付
- (3) 帯広畜産大学同窓会に関する情報の提供
- (4) 帯広畜産大学に関する情報の提供
- (5) 帯広畜産大学同窓会、帯広畜産大学および帯広畜産大学後援会が帯広畜産大学同窓会員に対して行う寄付の依頼およびアンケート調査の実施

納入願いを配布

3月20日 卒業式会長祝辞

3月20日 一般選抜後期日程合格者へ協賛金納入願いを発送

3月28日 一般選抜追加合格者へ協賛金納入願いを発送

4月22日 臨時役員会 開催

同窓会事務局の開設

平成18年4月1日より、帯広畜産大学・本部棟・財務課内に事務局専用のスペースを確保し、同窓会事務業務を行うようになりました。支部会の開催に関しての個人情報の提供や会員の死亡報告など事務局にご連絡いただければ幸いです。なお事務職員の勤務時間は、月曜日と金曜日の午前10時から午後5時まで。火曜日から木曜日はFaxで対応します。

Tel&Fax：0155-49-5996

E-mail：dousous@obihiro.ac.jp

緊急時：0155-49- 以下を示す。

西村事務局長：5365 辻 庶務担当：5510

小嶋庶務担当：5547 柏村会計担当：5426

岸本名簿担当：5522

(以上 庶務担当：辻、小嶋)

平成17年度 事業報告 (平成18年6月末現在)

- 平成17年10月15日 帯広畜産大学同窓会総会（農協連ビル）開催
- 10月21日 学士編入学試験合格者、第3年次編入学合格者へ協賛金納入願いを発送
- 12月16日 推薦入学合格者、別科推薦入学合格者、大学院修士課程第2次募集合格者、外国人留学生特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
- 12月17日 第1回役員会 開催
- 平成18年2月6日 大学院修士課程第2次募集一般選抜・社会人特別選抜合格者、大学院博士後期課程外国人留学生特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
- 2月16日 大学院博士後期課程一般選抜・社会人特別選抜合格者、大学院修士課程国際協力特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
- 3月7日 私費外国人留学生特別選抜合格者、一般選抜前期日程合格者、別科一般選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
- 3月15日 卒業および修了予定者に終身会費

同窓会名簿担当からのお願いと報告

本年は2年に一度の同窓会名簿作成の年にあたります。本年度から樋口先生から担当が代わりスケジュールを把握するのでやっとの感じです。名簿の管理は、この同窓会報に同封されています「帯広畜産大学同窓会名簿変更事項届」による変更と名簿原稿を学内研究室や名簿委員に訂正作業をお願いしています。住所変更等ございましたら是非「名簿変更事項届」の送付をお願い致します。

また、「帯広畜産大学同窓会名簿変更事項届」にはプライバシーの問題と関連して不掲載の希望欄があります。不掲載を希望される方はこの欄の該当項目を指示（○印）して御返送頂ければ不掲載の手続きを致します。なお、「帯広畜産大学同窓会名簿変更事項届」の返送がない場合には掲載を了承するものとして取り扱わせていただきます。

名簿作成状況に関する報告は次のとおりです。

財団法人 帯広畜産大学
後援会賛助会員加入のお願い

1. 名簿作成

- ① 本年は名簿作成の年
- ② 昨年3月に卒業生・修了予定者に住所変更届と会費未納者へ振替用紙を配布
- ③ 昨年5-8月に各旧講座にお願いして卒業生・修了生・旧教官のデータ修正
- ④ 同窓会報と住所変更届の発送を印刷会社に依頼
- ⑤ 昨年9月の卒業生・修了生に②の作業
- ⑥ 正月明けに全教職員に名簿の修正依頼
- ⑦ 本年3月に卒業生・修了予定者に住所変更届と会費未納者へ振替用紙を配布
- ⑧ 印刷会社との打ち合わせ
- ⑨ 5月下旬から7月にかけて各旧講座・ユニットにお願いして卒業生・修了生・旧教官のデータ修正

2. 今後の予定

- ① 7月に同窓会報への同封物の確認、料金受取人払いのバーコード・承認番号の手続き
- ② 8月に名簿出版の案内、振替用紙、協賛広告案内、住所変更届の原稿作成、印刷会社へ送付
- ③ 8月に不明者一覧の作成
- ④ 9月に同窓会報と出版案内、振替用紙、協賛広告案内、住所変更届の発送（印刷会社）
- ⑤ 9、10月に協賛広告の確認と再依頼
- ⑥ 10月に現教職員の確認
- ⑦ 名簿発行11月、発送12月

(名簿担当：岸本)

財団法人帯広畜産大学後援会は、同窓生の皆様をはじめ帯広・十勝を中心とする企業、団体等からのご寄附を賜り、本学の教育研究活動、国際交流活動等に対する助成を行っております。しかしながら、長期にわたる低金利により助成事業の縮小を迫られている状況にあり、本財団の健全な運営並びに支援事業の拡充のためには、資金の恒常的な確保が必要になります。

昨年、同窓会会員の皆様には、本財団の賛助会員へのご加入について個別にお願いいたしました。その結果、現在335名の同窓生の方々にご加入いただいておりますが、このような状況をご理解いただき、母校発展のためになお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、賛助会費は一口1万円となっており、加入いただいた方には、毎年発行されます後援会助成事業の報告書及び帯広畜産大学概要を送付させていただきます。本財団の趣旨、賛助会員加入手続き等につきましてご不明な点がございましたら、下記までご連絡願います。

〒080-8555 帯広市稲田町西2線11番地
帯広畜産大学事務局内
財団法人帯広畜産大学後援会事務局
TEL0155-49-5995 FAX0155-49-5259
E-mail kouenkai@obihiro.ac.jp

訃 報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。[敬称略]

宮崎日出夫 (S18高等獣医)	熊谷 一雄 (S24農専・農芸)	飯田八洲司 (S44獣医)
佐藤 謹 (S18高等獣医)	大矢 昭三 (農専・農芸)	山下 明 (S36獣医)
遊佐 孝五 (S18高等獣医)	田村 昭敏 (S26農専・農芸)	和泉 康史 (S35獣医)
篠田廣一郎 (S18高等獣医)	山崎 武 (S25農専・農芸)	忍関 尚武 (S32酪農)
大野 新生 (S20獣医畜産)	松本 学 (S26農専・農芸)	米田 栄子 (旧姓藤原、S37酪農)
島影 邦弘 (S20獣医畜産)	喜沢 達之 (S26農専・農学)	中谷 義輝 (S41総農)
小野 高市 (S19獣医畜産)	阿諏訪次郎 (S35獣医)	松木 温子 (H15畜産環境科学)
広瀬 忠幸 (旧姓豊田、S24農専・獣医)	吉沢 宗敏 (S41獣医)	斎藤 進 (S61草地畜産専修)
白土 清蔵 (S22農専・獣医)	太田 正男 (S33獣医)	山口 義弘 (S40草地畜産専修)
渋谷 昭一 (S25農専・獣医)	藤田 幸平 (S28獣医)	

※2005年から2006年現在までに、本部事務局にご連絡をいただきました。

帯広畜産大学同窓会平成16年度会計報告

(平成16年10月1日～平成17年9月30日)

【通常会計】

収入の部

項 目	H16予算	H16決算	増 減	備 考
前年度繰越金	15,114,019	15,114,019	0	H15年度より
名簿販売	600,000	637,000	37,000	3,000円×209部、10,000円×1部
協賛金、終身会費	4,000,000	3,931,000	△ 69,000	終身・協賛20,000円×187名、寄付198,000円
雑収入	0	185,213	185,213	寄付、懇親会会費、預金利子など
特別会計から	0	0	0	
合 計	19,714,019	19,867,232	153,213	

支出の部

項 目	H16予算	H16決算	増 減	備 考
印刷代	4,500,000	3,619,654	△ 880,346	名簿、会報、封筒の印刷
大学後援経費	300,000	100,000	△ 200,000	後援会へ10万円、大学への20万円未納
通信、郵送料	1,500,000	945,011	△ 554,989	名簿、会報、案内状等の郵送
人件費	400,000	237,300	△ 162,700	アルバイト代
事務費	100,000	41,664	△ 58,336	コピー、封筒他
会議費	200,000	23,000	△ 177,000	役員会、代議員会
交通費	100,000	49,000	△ 51,000	役員旅費
役員手当	360,000	360,000	0	2年分(2万×18名)
記念品代	400,000	141,120	△ 258,880	キーホルダー882円×160個
協賛金返還	0	20,000	20,000	退学者へ返還
予備費	11,804,019	0	△ 11,804,019	名簿印刷予備費
雑費	50,000	149,152	99,152	振込手数料他
合 計	19,714,019	5,685,901	△ 14,028,118	

通常会計収支差額：収入－支出＝19,867,232－5,685,901＝14,181,331円（次年度繰越へ）

単年度収支差額：収支差額－前年度繰越金＝14,181,331－15,114,019＝△932,688円

【特別会計】

収入の部

項 目	H16予算	H16決算	増 減	備 考
前年度繰越金	9,700,000	9,700,000	0	H15定額郵便貯金の繰越
利子	0	1,525,300	1,525,300	定額郵便貯金満期解約の利子
合 計	9,700,000	11,225,300	1,525,300	定額郵便貯金670万円、普通預金4,525,300円

支出の部

項 目	H16予算	H16決算	増 減	備 考
通常会計へ	0	0	0	
合 計	0	0	0	

平成16年度監査報告（平成16年10月1日～平成17年9月30日）

帯広畜産大学同窓会の上記期間の監査を実施したところ、適切に処理されていることを認めます。

平成17年10月11日

監 事

小野 斉 
石橋 憲一 

帯広畜産大学同窓会平成17年度予算

(平成17年10月1日～平成18年9月30日)

【通常会計】

収入の部

項 目	H17予算額	H16決算	増 減	備 考
前年度繰越金	14,181,331	15,114,019	△ 932,688	H16年度より
名簿販売	600,000	637,000	△ 37,000	3,000円×200部
協賛金、終身会費	4,000,000	3,931,000	69,000	20,000円×200名
雑収入	50,000	185,213	△ 135,213	寄付、利子
特別会計から	0	0	0	
合 計	18,831,331	19,867,232	△ 1,035,901	

支出の部

項 目	H17予算額	H16決算	増 減	備 考
印刷代	700,000	3,619,654	△ 2,919,654	会報印刷
大学後援経費	500,000	100,000	400,000	大学20万円(16年度分)、後援会30万円
通信、郵送料	900,000	945,011	△ 45,011	名簿、会報の発送、料金受取人払ほか
人件費	700,000	237,300	462,700	パートタイム、学生アルバイト代
事務費	100,000	41,664	58,336	事務用品、コピー代ほか
会議費	200,000	23,000	177,000	事務局会議、役員会、総会ほか
交通費	100,000	49,000	51,000	役員旅費
役員手当	180,000	360,000	△ 180,000	10,000円×役員18名
記念品代	180,000	141,120	38,880	900円×200個
協賛金返還	0	20,000	△ 20,000	退学者
予備費	5,121,331	0	5,121,331	次年度繰越
雑費	150,000	149,152	848	振込手数料、弔電代他
特別会計へ	10,000,000	0	10,000,000	
合 計	18,831,331	5,685,901	13,145,430	

単年度予算収支差額：(収入－前年度繰越金－特別会計から)－(支出－次年度繰越金－特別会計へ)
 = (18,831,331－14,181,331－0)－(18,831,331－5,121,331－10,000,000)
 = 940,000円

【特別会計】

収入の部

項 目	H17予算額	H16決算	増 減	備 考
前年度繰越金	11,225,300	9,700,000	1,525,300	H16年度より
利子	0	1,525,300	△ 1,525,300	
通常会計から	10,000,000	0	10,000,000	
合 計	21,225,300	11,225,300	10,000,000	

支出の部

項 目	H17予算額	H16決算	増 減	備 考
通常会計へ	0	0	0	
合 計	0	0	0	

(会計担当：柏村)

●●● 帯広畜産大学のキャンパスを写真でご紹介 ●●●



昭和40年代の本学全景



平成18年現在の総合研究棟1号館
(昔の駐車場は芝生)



総合研究棟3号館



新設総合研究棟4号館
(大動物特殊疾病研究センター)



1号館1階玄関ホール



オープンキャンパスポスター



瑠璃色のカワセミが潜むピオトープ

畜大オリジナル

全国宅配承ります。

帯広畜産大学生生活協同組合

☆おすすめセット☆

品番 B

オリジナルラベルワイン赤・白
オリジナルチーズ2個セット



品番 G

ゼオライトマスク



品番	商品名	代金(税込み) 北海道内発送	代金(税込み) 北海道外発送
A	オリジナルラベルワイン赤/白 2本セット	2,935円	3,460円
B	オリジナルラベルワイン赤/白2本 チーズ2コセット	4,405円	4,930円
C	オリジナルラベルワイン白/清見 2本セット	4,394円	4,919円
D	オリジナルラベルワイン赤/白 清見3本セット	5,599円	6,124円
E	畜大オリジナルクッキー アソート(畜大牛乳入り)	1,725円	2,250円
F	畜大オリジナルクッキー 牛焼き印(畜大牛乳入り)	1,470円	1,995円
G	ゼオライトマスク5パック (鳥インフルエンザ予防マスク)	3,150円	3,360円

FAXのご注文はこちらをご使用ください。

おとこ	都道	商品	品名
〒	府県	記号	
TEL ()		数量	税込 価格
ふりがな	のし無し・のし有り		
お名前	様	お中元/お歳暮/その他 ()	

Webのご注文はこちらのURLでお願いいたします。 <http://www.hokkaido.seikyoku.ne.jp/obichiku/>

お問い合わせ先 〒080-0834 北海道帯広市稲田町西2線11
Tel: 0155-48-2284/Fax: 0155-48-2733

帯広畜産大学生生活協同組合